

透谷を嗣ぐ人びと

—雑誌「詩精神」と梅川文男—

尾 西 康 充

序

プロレタリア文学運動を指導してきたナルプ（日本プロレタリア作家同盟）は一九三四（昭和九）年二月二日に解体を決定する。結成以来、工場や農村にサークルを組織させ農民や労働者に作品の創作を奨励すると同時に、広汎な大衆運動を組織するための中央指導部を設立させた。しかし満州事変をきっかけにして急激にファッショ化が進み治安当局による弾圧が繰り広げられる。白色テロが公然と行われるようになると、中央指導部には「唯物弁証法的創作方法」のスローガンの下で運動を集中させるだけの力が失われ、ナルプの戦線から離脱して独自に創作を行おうとする作家も現れ始めた。ナルプ脱退者が中心となった「文化集団」が創刊されたのを嚆矢として、分派活動ともいえる雑誌の発刊が相次いだ。「文学建設者」「文学評論」「関西文学」——前年には日本共産党中央委員の佐野

学・鍋山貞親が獄中から転向声明を発表、政治の舞台でもへ転向の季節へを迎えていた。

北村透谷の遺稿「夢中の詩人」を巻頭に置いて雑誌創刊の辞に代えたのは「詩精神」であった。神崎清の斡旋によって、朱色のペン書き書簡を美那子夫人から借りて掲載したという。「拝啓、僕、まだ脳病の魔王に、にらめつけられて、とても筆を持つ事などは、出来ず」という書き出しは、透谷が「アンビションの梯子」から転落して鬱ぎ込んでいた頃の心境を表している。自由民権運動との訣別、商業活動の失敗、それらの蹉跌を経験した後に美那子との恋愛を通じてキリスト教に入信することで、透谷が自らの魂を甦らせた〈転向体験〉——創刊号の巻頭に透谷の書簡を置いたのは、「詩精神」に集まった若い詩人達が自ら再生する願いを託したものだと考えられる。伊藤信吉氏によれば、それは「マルキシズム文学の政治的〈優位〉論もしくは政治的金縛りからの自己解放」であったという。¹

「詩精神」は三四年二月、新井徹と後藤郁子が中心になって創刊された。彼ら夫婦が編集や経理などの実務を担当し、多彩な執筆者に寄稿を呼びかけた。遠地輝武や小熊秀雄、大江瀧雄、田木繁などのマルキシズムの詩人はもとより、草野心平や小野十三郎、萩原恭次郎などのアナキズムの詩人も次々に作品を発表している。さらに百田宗治や尾崎喜八、井上康文などの民衆詩派のグループが参加、彼らもまた透谷から強く影響を受けながら、労働や農民の生活を歌った詩人達であった。このようにプロレタリア詩人が結集したという点で、「詩精神」は「プロレタリア詩雑誌の（正系）」ともいえる位置を占めた雑誌である。²⁾

梅川文男——三・一五事件で受けた五年の懲役を刑期満了まで務め、三重県松阪に帰郷していた彼は「堀坂山行」「佐野史郎」のペンネームを用いて「詩精神」に寄稿している。梅川の作品は労働運動、農民運動、水平社運動の最前線で活動し続けた自己の体験に即して書かれたものばかりである。そこで日本現代詩史における「詩精神」の意義を振り返りながら、梅川の文芸活動を検討しよう。

—

「詩精神」創刊号の巻頭には、遺稿「夢中の詩人」に続いて「藤村氏に透谷をきく」「透谷について」など、まさに透谷特集ともいふべき記事が並べられている。「藤村氏に透谷をきく」は、新井徹

が井上康文に案内されて飯倉片町の藤村邸を訪問しインタビューした内容がまとめられている。新井によれば、透谷は「日本資本主義が胚胎した浪漫主義文学の先駆者」でありながら「余りに早くも将来された現実の破綻に限りない苦悶と傷心を抱き、その生理的に薄弱なるインテリゲンツの肉体はいたましくもぐれおれて」縊死するに至った。その短い生涯で咲かせた「新詩の花」を継承した藤村の許を訪れて、「新しい詩の先覚者」としての透谷の精神を訊こうとしたのである。

四頁にまとめられたインタビューのなかで最も印象的なのは、藤村が透谷の読書方法に触れて「結局は自分の中にあるものを讀んだ」のではないかと再度述べている点である。「北村氏もセクスピアを讀み杜子美を讀んでも結局は自分自身を讀んだに過ぎないのではないですかね」。藤村が語るように、透谷は自己の内面に忠実で、その世界を拡張しようとするロマン主義詩人であった。さらに藤村の発言で興味深いのは、つぎのようなくだりである。

「一度短刀で咽喉を突いて弱つてゐる時、巖本君が自分では駄目だからと云つて押川方義先生（東北学院院長であつた人）を見舞ひに行つた。何とかして救ひたいと思つたわけだが、透谷は「自分には信する力がなくなつてゐる」と云つて、信仰が自分を立直すやうにならなかつた。これは一方仏教的なところか

あつたのではないか。」

明治キリスト教界の指導者・押川が透谷の病床を見舞ったエピソードはよく知られている。もはや信仰心が薄れてしまったという発言を受けて、藤村は、「近代との闘いに敗れた透谷が晩年、西洋的キリスト教から東洋的仏教の境地へ回帰したと考えるへ敗北の透谷像」を描き出した。このとき藤村もまた「夜明け前」の日本に回帰していたことを考慮すべきであろう。終生信仰を失わなかった美那子が、自分の導きに従って透谷は信仰を持ち続けていたと語っているのとは対照的である。³⁾

新井は藤村の話を読んで「新しい基督教の福音にその憧憬の瞳を燃やしてゐたのもいつしか厳冷な現実の姿に打消されてゆき、遂には宗教をも人世をも見失つていつた透谷の経路がこゝに示される」という感想を記している。

インタビューのつぎに掲載された記事は中野重治「透谷に就て」である。当時中野は、三二年四月四日のコップ（日本プロレタリア文化連盟）弾圧に遭つて豊多摩刑務所に収容され、治安維持法違反の容疑をめぐって公判中であつた。「透谷に就て」は、新井が獄中の中野に郵送した質問状に対する返信である。最後に「一九三三年二月一二日新井徹宛」と書かれている。内容から推測すると新井は、透谷から何を学ぶべきか、という質問を中野に投げかけていた

ようで、それに対して中野は「透谷のことだが、実際のところ僕はよく知らぬ」といい、「透谷から何をまなぶべきか？」といふことも、だから僕には荷のからすぎる問題で、僕としては、透谷から何をまなぶべきかは僕はしらないが、透谷が如何にあつたかをしらべれば何をまなぶべきかわかるだらうとでも言ふ外はない」と翰晦気味に答えている。

しかし中野は、明治キリスト教が新しい宗教として魅力的な哲学や世界観を近代日本社会にもたらしたことや、日清戦争が近付く頃、徳富蘇峰が鮮やかに旋回して大衆迎合したのに比べて透谷はそれができずに「眼を地上から天上にむけた」が最後は自殺に追い込まれたこと、などを指摘している。

そんなわけで透谷は眼を地上から天上へむけた。その辺の事情は彼の「明治文学管見」によく現れてゐると思ひます。あのなかで彼は明治文学を追つて行つて、当時の批評家の夢にも問題にしまかつた命題を取り出して、「乞ふ、百年の後を見よ。」など、言つてゐる。しかしそのあたりへ行くと彼もかなり窮してゐる。勿論彼の不名誉ではない。しかしとにかくそんな具合で、あの「明治文学管見」の道行きと彼の自殺への道行きとは深い関係があるやうに思ひます。そのことを考へると僕はやはり彼はえらかつたこと——といふと、とにかく高くかけたこと

とが分かると思ふ。

中野は、政治の上でも文学の上でも透谷が窮していたことを指摘しつつ、彼が巷間に埋もれず高く翔ったことを礼賛している。そして右のように述べたうえで「明治の文学の成長とその曲り具合、明治の政治の成長とその曲り具合、それからキリスト教、そんなもの、間で彼はいはゞ軌^きつた（視に砂がはいつたやうに）のだと思ひます」と結論する。透谷のことはよく知らないと最初に断つたにもかかわらず、中野の言葉は透谷の生涯を的確にとらえている。ちなみに中野はこの手紙を記して五ヶ月余後に転向上申書を提出して釈放、彼もまた内部にへ軋みんを抱え込むことになる。

高く翔った透谷の精神を嗣^{ついで}ごうとするかのように、「詩精神」の若い詩人達は、政治的敗北を乗り越え自分の声で歌い始める。伊藤信吉氏は彼らの創作態度について、つぎのように説明している。

ただ全体を通じていえることは、政治的優位のへ枠^へから離れたことよって、当然のことながら詩人における主体的営為——その自律性が濃くなり、同時に芸術的形象化の意識が濃くなったというのである。そこに主題形成の多様化と表現意識の強化がもたらされたといつてよく、小熊秀雄の開放的表現や、田木繁の生産場面詩篇などの業績は、それまでにない注目

すべき成果であつた。

伊藤氏によれば、ナルブ解散という政治的敗北は結果として詩人達に「主題形成の多様化と表現意識の強化」をもたらしたという。事実、「詩精神」創刊号を見るとそれまでの詩雑誌では考えられなかつたような多彩な執筆者が顔を覗かせている。詩を寄稿しているのは千家元麿、後藤郁子、遠地輝武、大江満雄、森谷茂、松田解子、神保光太郎、新井徹、田中英士、鈴木泰治、植村諦、小熊秀雄。他方、詩論は森三千代、横本楠郎、北川冬彦、草野心平、尾崎喜八、後藤郁子、林房雄、郡山弘史、井上康文である。さらに「小説家はどんな詩を読み、詩をどんなに考へてゐるか」というアンケートを行い、その返信を掲載している。アンケートに答じているのは細田源吉、宇野浩二、葉山嘉樹、藤森成吉、徳永直、本庄陸男、平林たい子、鈴木清、貴司山治などである。

このような多彩な顔ぶれが揃つた「詩精神」創刊の経費は、新井・後藤夫妻の小資本によつて賄われた。奥付には、彼らが出資して設立した前奏社が雑誌の発行所として記されている。第一巻第四号から同人社友制に切り替えて経営基盤の強化が図られるのだが、最後は同人が三四名にまで増えたにもかかわらず資本力の不足から廃刊に追い込まれる。形の上では、貴司山治が創設した文学案内社の雑誌「詩人」に発展的解消を遂げることになった。「詩精神」と

しては、合計すると一九三四年二月(第一卷第一号)から三五年一月(第二卷第一〇号)まで二二号が出版された。

ところで最終号では、「詩精神」の發展を振り返って新井が「詩作家六十四人論」を執筆している。誌上で活躍した六四名を取り上げ、インテリ詩人、勤勞詩人、労働詩人、農民詩人の四つに分類して「鳥瞰図」を描いてみせた。そのなかで注目したいのは農民詩人に区分された「堀坂山行」である。三重県松阪にある雄大な堀坂山(ほりさかやま)にちなんだペンネームを付けたこの詩人は、当時三角運動と呼ばれた労働運動、農民運動、水平社運動が連携する松阪独特の無産主義運動の最前線に立ち、社会的弱者の解放を要求して激しく闘争していた。詩の専門的な技法は劣るかも知れないが、松阪方言を使つた彼の作品は小作人や被差別部落民の声を忠実に代弁するものであった。では新井はどのように梅川を紹介しているのか、つぎに引用してみよう。

堀坂山行 農民組合運動のさ中にある詩人、「メツセージを託す」といふ水平社の同志に送つた作品は元氣一杯のものであつた。簡明直截な手法で不要の修飾は一切つけないといふ実用型だ。「奈良漬」など素朴なよさがある。「無題」にはふてぶてしい力強さがあふれてゐる。小説に於て被圧部落を取扱つた【酒】を書いたこの作者が、本年度に於てびたりと筆をとめた

のは淋しいことであつた。

新井は、梅川が農民組合運動や部落解放運動に従事し、それらの実践にもつづいた詩や評論を執筆している点に触れている。彼が「簡明直截な手法」で創作した作品は「元氣一杯のもの」であり、他の作品にも「素朴なよさ」「ふてぶてしい力強さ」があるといひ、三五年になつて筆が止まつたことは惜しいとする。梅川の創作が中断していたのは、ちょうどその年に度会郡四郷村大字朝熊(あさま)勢市朝熊で発生した朝熊区政差別に関わる糾弾闘争に参加したことや、社会大衆党南勢支部が結成され執行委員長に就いたことにより、創作する時間が奪われてしまつたためと考えられる。ではつぎに梅川の創作活動を具体的に検討してみよう。

二

大阪刑務所を出獄した梅川が松阪に帰郷したのは一九三三年二月である。浅野晃や門屋博、水野成夫らの解党派結成、同年四月には佐野・鍋山の転向声明など、世はへ転向の季節を迎えていたが、梅川は獄中非転向を貫き五年の懲役を刑期満了まで務めた。しかし帰郷した梅川を待ち受けていたのは三月一三日未明の県内一斉検挙事件であつた。このときのことを梅川はつぎように回想している。

私は、出獄、帰郷してから約一ヶ月目の三月十三日未明、三重の党組織を中心として、各団体は武装警察官に襲われ、弾圧、検挙された。三重県連合会(全国農民組合全国会議派・著者註)の受けた被害も大きかった。各支部数十名の組合員は拘引され、組織は破壊された。私は自宅搜索を受けただけではないだ。

足かけ六年、運動から置いてけぼりをくいと、情勢を把握しかねていた私は、その間にでた新聞、雑誌の膨大な綴りこみを繰ったり、同志から話をきながら、六年の空白をうめ、六年を追跡するのに懸命だった。半年は、まず静養と、肚をきめていた私も、目の前で組織が破壊され、崩れてゆくのを、ちつと見ているわけにはゆかなかつた。疲労しきつていた身体を、いたわつてばかりもおれなかつた。すわらされつゝ来て来たため、少し歩けば、がくがくして膝をつきそうなほどに弱つていた。しかし、やらねばならなかつた。検挙もれの同志と、また引つぱられるのを覚悟で村々をまわつて、おびえている組合員を励まし、支部組織の整備と、連合会の再建に動きはじめた。

全国農民組合(全農)が左右に分裂した後、三重県連合会は党の影響が強かった全農全国会議派(全会派)の方に属した。東大新人会の出身・河合秀夫の指導によって早くから小作争議を階級闘争の

一局面と見なし、調停主義を排して貧農を結集して革命組織を結成する「農民委員会」活動を採っていた。三重県連合会が運動を強化するために常任書記の派遣を要請、党中央からオルグ・梶田茂穂が来県した。梶田は早速、岩瀬仲蔵と小椋重昌を入党させ、岩瀬には日本労働組合全国協議会(全協)、小椋には日本共産青年同盟(共青)の県内組織の整備拡張を命令した。基本的には全農全会派の線に頼りに「赤旗」配布網を広げ、「赤旗」読者グループを確立して行った。その結果、松阪を中心として北は四日市、南は尾鷲、西は伊賀上野まで勢力を伸ばすことに成功する。いわゆる三・一三事件は、当時非法とされたそれらの共産主義勢力の拡張を警戒した治安当局が運動の圧殺を試みたのである。一五二名が取調を受け、送局された五一名の内、起訴七名、起訴猶予二五名であった。

この弾圧によって県内の党および全協、共青の組織はほぼ壊滅してしまふ。そもそもそれらは非法法であっただけにはじめから弱体であった。それに比して合法的に発足していた農民組合や水平社は三重県の場合、歴史も古くまた根深かった。三重県の社会運動研究者・大山峻峰氏によれば、それらは「強靱な部落大衆の生活のなかに守られていた」のであり、「三・一三の大弾圧のなから、萌えてくる若芽のように起ちあがって、組織を再建し得たのも、松阪地方の集団的な部落の人々の組織的な力によるものであった」とい

う。⁸ 同様の指摘は、「日本農民運動史」のなかでもなされている。

三

昭和八年の弾圧後の全農県連再建運動は兵庫県連淡路島より刑を終えて帰郷した梅川文男氏と日野町二丁目、東・西岸江、花岡の人びとによって行われた。この当時すでに全農全国会議の高度な運動方針、行動綱領をもって農民の日常闘争を革命的な方向に導き、貧農を革命的組織に結集するという方針は極左的偏向ではないか、それでは組織の大衆化は望めない、という意見が胎動し、このままではいたずらに犠牲を多くするというので全農復帰運動が起こり、昭和九年（一九三四）全農第七回大会において大阪府連、奈良県連が、そして昭和一〇年には三重県連も総本部に復帰した。⁹

三・一三事件後の組織再建、そして総本部派への復帰という難しい局面を梅川は被差別部落の民衆と共に乗り越えたという。その頃に対峙していた情況の厳しさを考えるならば、彼らの闘いは特筆されるべきである。そして梅川が「詩精神」に詩や評論などの作品を発表したのは、まさにその時期に当たるのであり、争議に追われる生活をしながらわずかな時間を惜しんで執筆していたことが推測される。ではつぎに梅川の作品を具体的に見てみよう。

「詩精神」に最初に発表された梅川の作品は、一九三四年五月号（第一巻第四号）掲載の「春になつたゾ——獄中の一同志に——」である。三・一五事件、四・一六事件で有罪判決を受けて服役中の仲間にはげられた詩である。発表当時はタイトルを含めて作品中の「同志」という表現には伏字が施されていたが、それらをすべて復元したものをつぎに引用する。

春になつたゾ！——獄中の一同志に——

同志よ！

春になつたゾ！

鉄窓ちかく

まがりくねつた枝をのばした桐の木に

ポツクリポツクリ嫩葉が

くつ、き出したにちがひない。

——もう

凍傷はなほつたか？

左手の中指とくすり指の

そのみ皮膚はうすく

こまかく皺よりなめらかな光沢をもつた

凍傷の傷跡は

一年まえまでつゞいた生活の記憶に

か、らうとする靄を払ひのけ

昨日のことのやうに生々しくおもひ出させる！

鉄窓の外はまだうす暗くこゝえてゐた朝

あの熱い味噌汁がすこしもはやく吸ひたくて

グツと食器口に手を突きこんだ時だつた

暗紫色に腐れ腫れあがつてゐたこの指は

よく熟れた水蜜桃の皮をむくやうに

グツチャリつぶれて肉を露出した。

冷気の底の監房で

申しわけにくれる薬をつけたつてなにな、なる

だが同志よ、運動場の柳に緑が

やつと光り出した頃だつた

腐つた指にうつすら皮がうかび

紫色がかすかに消え去るのを発見した僕は

やうやく幅ひろく長時間監房に

とどまり出した陽の中に

腕さしあげ指をのばし

春を歎呼した。

同志よ

十月ごろから、君を、

なやましはじめた凍傷は、もう

なほつたのであらう

同志よ！ われわれには

あす、あさつての安全は保しがたい

僕が出たら君はゐなかつた

君が出るとき僕はどこにあるだらう。

同志よ！ 君は

凍傷のいえた手をふり

鉄窓から流れこむこの春の陽に胸を張れ

僕は、かつて君の苦闘地豊中支部へ

自転車とばすまでのこの三十分を

五年ぶりの春の陽の中に

のびのび四肢を投げ出し

楽しもう！

引用するに当たつて、作品中伏字が施されていた第二連一五行目「申し××にくれる」、第三連四行目「君の苦×地」を復元した。ま

た第一連五行目「嫩葉（わかば）」は俗字を直し、第三連五行目「自転車とばすまで」は誤字が含まれているので訂正した。「春になつたゾ——獄中の一同志に——」は梅川と同じく思想犯として大阪刑務所に服役していた仲間に乗げられた詩である。「同志よ！ われわれには／あす、あさつての安全は保しがたい／僕が出たら君はみなかつた／君が出るとき僕はどこにあるだらう」と語りかけている。大阪刑務所で囚人が服役している姿は、梅川と斜め向いの独房にいた朝倉菊雄、すなわち転向作家・島木健作が第一創作集『獄』（三四年一〇月、ナウカ社）に所収される「癩」「盲目」「転落」「医者」などで克明に描いている。

つぎに「詩精神」三四年六月号（第一巻第五号）掲載の「メッセーヂを託す——水平社の同志におくる——」を紹介する。全国水平社（全水）第二回大会は三四年四月一三〜一四日、京都の東山区二条通東大路東入にある岡崎公会堂を会場にして開催された。水平社の創立大会が開かれたのと同じ、まさに記念すべき場所での大会であった。三府二一県の代議員一五三名が集まり、二日目の審議には傍聴者二〇〇余名も詰めかけて活発な討議が行われた。

メッセーヂを託す——水平社の同志におくる——

京都まで

三十里

——旅費をどうする？

執行委員会の進行は

小首をかたげて停止した

しかも君等は

昂然と提議、決定したといふ

——自転車で行くんだ！

あ、京都までは

三十里！

一九二二年三月三日

——エタであることの誇り得るときがきたのだ、と

千年來、冷嘲、虐待の荆棘の中を

ひきずり廻した奴らのだと元しめあげ

憤怒をもつて

公然たる組織的闘争を宣言し

「よき日」への希望と感激に

泣いて歓呼した

お、創立大会の地

京都へ！

「非常時」ゆえにいよゝのしかゝる身分制を背おひ

十二ヶ年間の血みどろの闘争歴史に體をひきしめ

決意かたくハンドルをにぎり

熱意をこめてベタルをふみしめふみしめ

桜にうかれ酒と女を擁し

クラゲのやうな奴らのブツ飛ばす無体な自動車の

もうもうとまきあげる砂煙

君等は眉まで白くあびながら

長駆参加する

全国水平社第十二回全国大会

だが同志よ――

「全国大会情報」と、この国の地図をひろげてみよう

お、君等と同じく

福岡から山口から岡山から

裏日本の福井から、全国隅々の陋巷から

君等の誇りいふ精神なる――

エタ魂をさらめかせ

霞の底を貫きのびた甍々たる

文化、産業の動脈

山陽山陰、東海中山道を

陽にやけ汗と埃にまみれた面をきつとあげ

全国大会目ざして自転車で

お、駆せくる駆せくる馳せ集まる！

三十里！

たつた三十里！ 一息だ！

同志よ！

これを託す！ メツセーヂだ！

窮乏と飢餓の泥沼の中に蹴とはされ

こねまはされてゐるわれゝ貧農の

生活現状をブチまけ

君等被圧迫部落民との

「よき日」への協力を誓ひ

熱意をこめておくる、この、

メツセーヂ！

届けてくれ！

全国六千部落三百万の兄弟に！

同志よ！

途中の道に気をつけて行つてくれ

使命を果し元気で帰るのを待つてゐる

——では
握手だ！

——一九三四・四・三——

引用するに当たって、作品中伏字が施されていた第三連四行目「×××しめあげ」、第三連二行目「君等被××民」を復元した。

また濁音、半濁音の区別があいまいな箇所もあったが、初出の原文に従って引用した。梅川が県連の同志にメッセージを託したというこの大会では、二日目の審議に、中央委員会から重要な議案が提出されている。当時、北原泰作や朝田善之助らは部落解放運動を階級闘争や社会主義政党的立場や利害に従属させ、社会主義革命によって部落解放が実現すると主張、三二年三月に「全国水平社解消闘争委員会」を結成した。革命運動への水平社の合流・解消を求め、全協や全農全会派などの非合法的地下運動と連携、共産主義的色彩を濃くしていた。いわゆる解消派と呼ばれるグループには大阪、京都、福岡、岡山、三重、愛知、広島、愛媛にまたがる二四団体、二六六名が加盟した。三重県では、三二年九月頃から全農全会派の線を頼りに赤旗配布網を広げ赤旗読者グループを確立し、党の目的遂行の行為を果たす。しかし三・一三事件が発生、全水三重県連の七九名が検挙、二六名が送局されることになった。¹⁰⁾

このような大弾圧が全国的に行われるのを目の当たりにして、中央委員会は、解消派の「誤謬を精算」することを求め、第一二回大会で「一九三三年度闘争方針大綱に関する件」を提出する。それが二日目の重要な議案であった——「全水解消論の誤謬を精算し、全水を拡大強化すると共に、被圧迫部落民の不平不満と要求を余す処なく取上げ闘争を激発し之を組織すべきである」。¹¹⁾

結

梅川が創作の筆を執ったのはナルプ解体後、それまでプロレタリア文化運動に関わっていたものたちが政治の現場から離れ文学の閉域に入り込んで行った時期であった。当時大阪で活動していた宮西直輝は、亀井勝一郎の「政治主義」を批判しつつ私どもは政治そのものから目をそむけてしまった。文学の領域内でのみ文学を解決しようとしていた」という自己批判の文章を引きながら、ナルプ大阪支部のほとんど全員が「解体を契機に政治から眼をそむけ、なだれをうつつが如く一斉に『文学』へ転向して行った」と語っている。それまで彼らの行動原理となっていた「政治の優位」が崩れ去った瞬間である。¹²⁾

他方、プロレタリア文学の壊滅を「政治の呪縛からの解放」として肯定的に捉えた作家もいた。林房雄や武田麟太郎らは小林秀雄と共に「文学界」を創刊、ナルプから見れば分派活動ともいえる雑誌

が簇出して（文芸復興）が謳歌され始める。そのような時代に書かれた梅川の作品はどれも政治的色彩が濃厚で、新しい文芸の潮流から見れば旧態依然としたものであったかも知れない。しかしそれだからこそ自分の素志を抱き続けた希有な作品ともいえる。本稿では詩を二篇しか紹介できなかったが、「詩精神」に掲載された梅川の全作品は左掲する表の通りである。それを見ると、作品の数こそ少

ないが、苦難の道をたどりながら創作の筆を執り続けた詩人・梅川文男の姿に近代のとは口で艶れた（透谷の影）を見出せるのではないだろうか……。近代社会の（軋み）を的確に言い当てながら（軋み）を自己の内部に抱え込んでしまった透谷、近代社会になお残る封建的差別観と闘い、その（歪み）のなかで苦難を強いられた梅川、彼らの文学から学び取るべきものはまだ多く残されている。

年	月号	巻号	種類	作品名
三四年	五月号	第一卷第四号	詩	春になつたゾ！——獄中の一同志に——
	六月号	第一卷第五号	詩	メツセーヂを託す——水平社の同志におくる——
	七月号	第一卷第六号	詩	奈良漬
	八月号	第一卷第七号	隨筆	白いま、とラチオ（佐野史郎の筆名で発表）
	九月号	第一卷第八号	詩	ハムレット
	一〇月号	第一卷第九号	小説	酒
	十一月号	第一卷第一〇号	詩	無題
	十二月号	第一卷第一一号	評論	部落民文学に就いて
三五年	二月号	第二卷第二号	評論	詩精神作品評
	一一・一二月合併号	第二卷第一〇号	詩	選挙

註

本論文は拙稿「梅川文男研究(1)——プロレタリア詩人・堀坂山行の軌跡——」
 (人文論叢 第一八号、二〇〇一年三月)、「プロレタリア詩人・梅川文男(堀
 坂山行)とその時代——松阪事件に至るまで——」(三重大学日本語学文学
 第二号、〇一年六月)、「梅川文男研究(2)——プロレタリア詩人・堀坂山
 行の淡路時代——」(人文論叢 第九号、〇二年三月)、「プロレタリア詩
 人・梅川文男(堀坂山行)とその時代(二)——三・一五事件に至るまで——」
 (三重大学日本語学文学 第一三三号、〇二年六月)、「島木健作と梅川文
 男(堀坂山行)——『癡』をめぐって——」(近代文学試論 第四〇号、〇三
 年三月)の続稿である。

また拙稿「プロレタリア詩人——梅川文男のこと」(学塔 第一〇六号、三
 重大学附属図書館報、二〇〇〇年一〇月)、「小津安二郎の中学生時代・仄間」
 (三重シネマレター) 創刊号、〇一年五月)も合わせてご覧いただきたい。
 なお引用文中、今日の人権意識に照らして不適切と思われる表現が見られ
 るが、歴史的背景を知るための資料として修正を加えずにそのまま引用した。
 また旧字体は新字体に改めている。

- (1) 「一つの詩史」(『詩精神』 解題・回想記)、一九七八年一月、久山社、
二頁
- (2) 同右書、四頁。
- (3) Michael C. Brownstein, Kitamura Tokoku and Christian Missionaries,
 (学習院大学文学部研究年報) 第三六輯、一九九〇年三月、六〇頁)
- (4) 前掲(1)と同書、五頁。
- (5) 鈴木泰悟は三重県四日市市の出身。泰悟が本名で、澄丸、泰治がペンネ
 ーム。詳しくは拙書「プロレタリア詩人・鈴木泰治——作品と生涯」。
- (6) 「島木健作の思い出——『癡』のものであるなど——」(『季刊関西派』、一九
 四九年七月、竹書房、一五〜一六頁)

(7) 大山峻峰『三重県水平社労働運動史』(一九七七年八月、三一書房、一
 八頁)

(8) 同右書、一三二頁。
 (9) 農民運動史研究会『日本農民運動史』(一九六一年四月、東洋経済新報
 社、六五〇頁)

(10) 『部落問題・水平運動資料集成』第三卷(一九七四年六月、三一書房、
 一五頁) 参照

(11) 同右書、一三三頁。
 (12) 『文学と政治——文学おける意志的情熱の相』(三)『現実』一九三四年
 六月、引用は『亀井勝一郎全集』第一卷(一九七一年四月、講談社、五
 〇頁)から行なつた。

(13) 「ナルプ解体と多数派」(『運動史研究』第一卷、一九七八年二月、三一
 書房、一六一頁)

—おにし・やすみつ、三重大学助教授—